

A Laborer who climbed up the Chimney in 1930

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18303

煙突男 田辺 潔小論

橋 本 哲 哉

目 次

はじめに

I 煙突男事件の顛末

II 田辺潔の略歴と「思想」・行動

むすびにかえて

はじめに

金沢市の旧市街中心から徒歩で30分位の距離のところ、田井菅原神社がある。現在は浅野川河畔から少し離れた天神町町内となっているが、旧田井村村域内である。この田井という地名は少々古いようで、加賀藩期の史料として「田井村次郎吉留帳」¹⁾なるものも残されている。筆者は現在、旧市街地の橋場町に住んでいるが、そこから勤務先の角間町までの通勤途中の場所でもあり、やや大げさに言うと旧田井村は朝晩通い慣れた道筋ともいえる。昭和前期の一時期、新聞の社会面紙上を賑あわせた神奈川県川崎の「煙突男」に関する若干の歴史的な考察を金沢の町名や神社、さらには私事も含めて書き始めたが、それには多少の背景説明が必要であろう。

小論を執筆している現在、岩波書店版の『日本史辞典』が刊行準備中で、筆者は30あまりの項目の執筆を担当した。その大部分は先行の辞典類にすでに掲載されている項目であるが、煙突男の項は多分初出と思われるものであった。そこで短い制限字数ではあったが、やや手間をかけて史料調べをしてみた。そして編集者に決められた当初の制限字数内で執筆した原稿は、次のよ

うな内容となった。

煙突男 えんとつおとこ 1930年の富士瓦斯紡川崎工場争議に出現した第1号で、以降一時流行した。労農党影響下の争議応援のため11月16日早朝、田辺潔が約40mの工場の大煙突に登った。度々の説得も聞かず煙と寒さに耐えて滞空130時間に及び、天皇の還幸途中赤旗が見えるのを心配した警察署長の調停で解決。

これで煙突男の概略は理解できるかと考えたが、他の日本史辞典等には見られない項目なので、とくに倍の行数を増やすようお願いし、次の原稿も合わせて提出した。しかし行数制限の編集方針は厳しく、残念ながらそれは認められなかったが、次のような説明を用意していた。

煙突男 えんとつおとこ 1930年の富士瓦斯紡川崎工場争議に関連して出現した第1号で、争議の要求を貫徹して評判となった。不況下の赤字経営で会社側は従業員の解雇を発表し、6月に総同盟指導の争議となった。いったんは解決したが、10月労農党影響下の従業員がストに入った。11月16日早朝、応援のため田辺潔（先祖は加賀藩金沢田井村の十村役で、北海道開拓移民に関係）が約40mの工場の大煙突頂上部に登り、赤旗を振り要求実現まで下りずと演説を繰り返した。度々の説得も聞かず、煙と寒さに耐えて滞空130時間に及んだ。見物人が1万人も集まり、また天皇の神戸の観艦式行幸の帰途列車から赤旗が見えるのを心配した川崎警察署長が調停して21日に争議は解決した。以降各地に煙突男が出現したが、田辺は33年横浜で怪死した。

それでも300字程度で、その説明のためにかなりの調査時間を費やしたが、いわゆる「労多くして益少なし」とは必ずしも思っていない。もちろん、こうした短い辞書類の原稿料が多いわけでは決してない。倍の字数としてようやく書き込むことができたが、調査の途中で田辺潔の先祖は加賀藩十村の家柄で、田井村出身ということが判明した。地図を広げて見ると、先述の田井

菅原神社とその周辺には田辺姓の家が数軒見える。前出の田井村次郎吉とは田辺次郎吉のことであり、後になってわかったことであるが、神社はもとは田辺家の氏神で、その庭園内に奉祀されていたのである²⁾。これらのことは後述するが、歴史を追いかけているとこうした偶然としか言いようもないことにしばしば遭遇する。それは必ずしも歴史の大道の上での話ではないが、他者がこれまで気づかなかった歴史の片隅に入り込み、なにがしかの事実を掘り起こすおもしろさは、その当事者にとっては「益多し」としか表現のしようがない。

I 煙突男事件の顛末

まず、煙突男の出現によってどのような事件が展開し、それが1930年という年の、とくに社会情勢とどのようななかかわりがあったのか、辞書の原稿では調査したが書き切れなかった部分も含めてここに紹介する。

「大煙突の頂邊から応援」「警官を手古ずらせる若者」。これが事件の第1報を伝える「東京朝日新聞」(1930年11月17日付)の記事の見出しである。短い記事なので全文を引用すると「四十余日にわたって闘争中の富士紡川崎工場争議は両三日前から幾分悪化の形勢であったが、十六日午前五時の始業時に同工場構内の高さ三百尺の大煙突の頂邊に年齢二十四、五歳の男がよぢ登り頂上の避雷針に赤の大旗を結びつけ、小旗を振りながら高声でストライキの扇動をしたため一時場内は騒然としたが、警戒中の警官が駆つけ非常動員を行って嚴重警戒したため平常通り就業したが、居合せた争議団員佐藤公平外二十一名は総検束にあひ、青年は五日分の食糧を携帯し頂上で握り飯を食ひながら赤旗を振って手こずらせてある」³⁾。この記事の脇には大煙突と煙突男の写真も掲載されており、臨場感あふれる情報となっている。写真付きであるから現場を見た上での報道であることは間違いなく、他の新聞もほぼ同内容であるので、以下新聞を中心に他の資料も交えて事件を再構成する。

1930年はいわゆる大恐慌の真っ只中にあり、合理化政策も加わって民衆生活は破綻に瀕していたといつてよい。倒産や操業短縮で労働者を解雇した工場・鉱山は1930年には5千件を上回り、翌31年にはそれも1万件に近づき、

両年での解雇者の合計は約28万人にもものぼったと推計されている。当然労働争議も多発し、1920年代後半は1年1千数百件レベルであったのに対して、30年には2,289件、31年には2,456件と急増した⁴⁾。それにもなって労働組合の組織率も1920年代の6%台から、30年代前半には戦前最高の7%後半へと推移している。

政治の面では政友会と民政党の対立のなかから後者の浜口雄幸内閣が登場し、緊縮財政・軍備縮小・協調外交を政策に掲げ、金解禁と産業合理化を押し進め、1930年5月の総選挙では単独過半数を獲得した。しかし軍部の軍縮に対する抵抗は根強く、大恐慌も一向に収まらず、加えて浜口は11月14日に右翼青年に狙撃されるという混乱ぶりであった。

この浜口遭難の翌々日、新聞には浜口の容態の詳細が掲載されているが、その傍らに前掲の煙突男の記事が登場する。

ところで1930年の富士瓦斯紡績争議は、6月に川崎工場で突然解雇状が会社側から出されたことから始まった。この富士瓦斯紡績川崎工場は第1次大戦期に操業を開始した当時としては比較的新しい工場で、最盛期は従業員数5千人を数える大紡績工場となっていた。そこに総同盟系の紡織労働組合と労農党系の富士紡従業員組合とが結成されていたが、関東大震災後の1925年には一度総同盟系の大争議も起きている⁵⁾。

「昭和五年六月二七日、突如として富士瓦斯紡績川崎工場（従業員二八九四名うち女子二〇〇五名において）三七八名の従業員の解雇状が出さ」⁶⁾れた。会社側の声明によると、この大不況で上期が大欠損になり株式も無配当としたこと、不況は深刻で回復の見込みがないこと、現状のままですると工場閉鎖となり労資共倒れとなることをその理由としてあげている。総同盟系の紡織労働組合川崎支部では早速従業員大会を開催し、解雇者数の半減、特別手当支給などの要求を掲げて争議団を結成し、会社側との交渉に臨んだ。その結果特別手当の増額などの調停を得、いったんは解決をみた⁷⁾。

しかしながら不況下の折、この人員整理に加えて同9月には「賃金1割の減給」と諸手当の減額という会社側からの追い討ちもかけられた。組合側は争議でもって抵抗したが、抗しきれなかったようである。労農党系の組合もこの時は一緒に争議に参加していたが、紡織労働組合側の対応に不満を持ち、

「富士紡従組は、単独でサボタージュを開始した。会社側は強硬な態度をとって、二五名の争議団員を解雇することとなった」⁸⁾。会社側関係者の談話の中に「十月の二十日迄に出なければ除名してしまふと云ふ通知を与えましたが、遂に参りませぬ」⁹⁾とあるので、おそくとも10月後半には争議が始まっていたと推測される。

地元の労農党の糸川二郎、斉藤金次、借家人同盟の中田惣一らが駆つけて争議の指導にあたったが、会社側は非常に強硬で、たちまち争議団は財政困難に陥った。当時の労農党委員長の大山郁夫は中央から石原美行を応援に送ったりしたが、簡単には状況を打開できそうもなかった。そうした最中に田辺深が煙突により登ったのである。

煙突に登った後、田辺をめぐる動きを最も報道量の多い「東京朝日新聞」の記事によって追ってみよう。

11月16日 (日)

午前5時 田辺深が煙突に上り、頂上に大きな赤旗を結びつけ、小旗を振って煽動の演説を行う。争議団員は総検束される。

夜 寒気のため田辺はほとんど一睡もしない。

11月17日 (月)

午前5時 田辺が演説を行う。

8時 油紙を敷き、外套をかけて睡眠。

午後9時半 警官の見守る中、争議団と田辺が一問一答。

10時 もうもうたる黒煙の中から身を乗り出し、下界を見下ろす。

「赤旗も顔も煤煙で真ッ黒け」。工場の塀の外は雑踏となり、工場側は電燈を増設する。

11月18日 (火)

午前6時半 争議団幹部・横浜合同労働組合佐藤賢治と警察署長と協議。

9時10分 佐藤が水・食料等をもって煙突に登り、田辺に下りるよう説得するが、不調に終わる。

午後5時 警察は夕食の供給を拒否。

11月19日（水）

正午 滞空80時間をこえ、田辺にやや疲労が見える。会社への交渉者が続々と現れる。

夕刻 特高課の警部と田辺が一問一答。

午後8時 検束中の争議団員保釈のため川崎警察署に出向いた弁護士も検束される。

11月20日（木）

午前9時半 会社が煙突下に縄を張り始めると、田辺は演説を開始。

9時50分 特高課警部につき添われた争議団の渡辺・杉田両名が説得。

10時半 渡辺が煙突に登って説得するが失敗し、田辺は争議の完全解決を要求する。

夜 田辺寿利・悌三兄弟と友人古野清人、会社と警察に田辺への勧告状を提案。

11月21日（金）

午前5時 滞空120時間となる。

10時 川崎大師縁日のため、5千人の見物の人手となる。

正午 群衆が1万人を数える中で、会社側と争議団との間の調停を川崎警察署長が行う。昭和天皇の神戸からの「還幸のお目障りを心配して」の調停。

午後1時 ほぼ交渉がまとまり、「下界がカブトを脱ぐ」。

3時22分 「滞空時間百三十時間二十二分の珍記録を作って」田辺は地上に下りる。鉄道病院に入院するが元気の様子。

以上がおおよその事件の経過である。田辺が煙突を下りたのは、新聞報道にあるように昭和天皇の乗る列車から赤旗が見えるという官憲側の心配がきっかけであったのは事実であろう。この事件を昭和前期という時代に置いて考えてみれば、それは納得できよう。その時に会社側と争議団が取り交わした覚え書きは、次のような内容であった。

覚 書

- 一、会社は争議者に対して金五千円を支給す。但右金額中には解雇者二十二人（夕刊に十七名としたは誤り）に対する解雇手当及び予告手当を含む。
- 一、右争議に関する全除名者は直ちに復職せしめ、会社規定による給料を支給す。
- 一、解雇者中社宅及び尚工塾に居住する者は昭和六年一月末日までに移転すること、但し移転料として家族数に応じ三十円乃至五十円、尚工塾居住者には十円を支給す。

煙突から下りた後田辺はすぐ入院したが、新聞によるとそこで次のような談話を語っている。「労働運動といふものは表面より影の応援者が余程辛い、今度の問題には私よりも争議団の人々が辛かったと思ふ。自分の今度の行動はチャンスを得たもので登ったのは午前5時であった。それから今日まで寒さと風のため苦しめられたが、目的が貫徹すればいいとそればかり考えてゐた。大便是まだ一度もしない。争議が長引けば一ヶ月位はかかるものと覚悟してゐた。昨夜の風雨はからだのしんまでしみたような気がして苦しかった。然しあれだけの群衆が我々の闘争を応援して呉れたことを思ふと誠に感謝に堪へぬ」（「東京朝日新聞」11月23日付）。

しかし、結局「哀れや煙突男告発と決定」となり、退院後の28日に住居侵入罪で川崎署に拘束されるところとなった。

この争議をバックアップしたのは新聞記事中にも少しあらわれているように、労農党系の活動家であった。そのへんの事情を含めたくわしい関連情報は一般の新聞にはあまり登場してこないの、別な角度から補足する必要がある。

「社会運動通信」は「労農党では、十八日晚川崎公会堂で大山郁夫氏等を迎へて応援演説会を開催する事に決し」¹⁰⁾合わせて11月16日付で以下のような檄文を発表したことを報じている。

一百七十尺の大煙突上に赤旗翻る！

川崎富士紡争議団の決死的壮挙

去る十月一日から川崎の富士ガス紡績会社（三菱系）を相手に必死のストライキを敢行してみた川崎富士紡争議団では、愈々最後の決死的闘争を敢行するため、着々準備をととのえてゐたが、今朝（十六日午前二時半）争議団の××君は死を決して一丈余の赤旗をたづさえて、一百七十尺余の会社の大煙突へのぼり、煙突の避雷針へその旗を結び付けた。今や川崎の一角に大赤旗が翻々として輝いてゐる。これを知った川崎署では、すは一大事とばかり煙突の下へ数百人の警官と暴力団とを動員してゐるが、只ヤレヨレヨとウロたへてゐるばかりで手の出しようがない。

上に昇ってゐる××君は「死んでも頑張るのだ」と悲壮な絶叫を続けてゐる。同君は充分の食料と棍棒を持って上つてゐるから、二十日間位は頑張れる筈だ。

下では二千三百の男女工が、これを合図に一斉サボタージュに遁入り声を合せて「赤旗」を歌つてゐる。

一方警官隊は争議団を総検束にしたが、予め有力な幹部数名が姿をかくしてゐるので、第二第三の戦術がやがて京浜地方の労働者を驚かすに至るだろう。

更に労農党東京支部連合会では本日神田の松本亭で第二回大会を開いてゐたので、早速争議団に対する徹底的応援を決議すると同時に直ちに中村高一以下五名抗議委員を挙げ川崎署へ抗議に押しかけ、争議団員の即時釈放を要求した。今や川崎では全市の市民と横浜からの見物で鼎の沸くやうな騒ぎだ。

一九三〇、^(九)九、一六

労農党本部

翌々の18日の演説会は大山を迎えて大盛況だったようで、「一千五百の聴衆殺到し場外に溢れ」¹¹⁾といった状況を呈した。そして以下の決議文が採択され、工場長に突きつけられることとなった。

決 議 文

- 一、四十八日の決死の闘争を続けてゐる争議団に対し、本労働者大会は満場一致を以て応援する。富士紡会社は従業員の八ヶ条の要求を即時承認すべし。
 - 一、煙突上の争議員に対し、水攻め、煙攻めの如きを中止するとともに、同時に食糧を供給する争議団の自由を承認すべし。
 - 一、富士紡会社は争議に対する経済的、人道的、政治的、社会的の一切の責任を負ひ、全労働者及び全川崎市民に謝罪すべし。
- 右決議す。

また争議解決後の情報として、「社会運動通信」は次のようなことも伝えている。「同争議は開始以来、労農党内紛問題に災はされ解党派、解消派組合第一主義者、労農党第一主義者、等々入り乱れて、むしろ闘争力を弱めた感があり、争議指導の中心、神奈川合同労働組合川崎支部の苦心は並々ではなかった」¹²⁾。こうした労農党系の活動家の関係資料については、後述する。

II 田辺潔の略歴と「思想」・行動

煙突男田辺潔の行動とその際の争議の概要はおおよそ理解できたと考えるので、以下彼の経歴と思想形成・行動背景等をおってみることにしよう。

田辺潔の経歴等に関しては、次のような談話が残されている。『神奈川県労働運動史(戦前前)』中の資料であるが、あまり目に触れやすいものではなく、またいくつかの検討すべき手がかりを与える貴重な内容でもあるので、少し長文の引用となるが紹介しておく。口述者は東洋大学の米林富男教授で、記録者は歴史家の加藤佑治氏となっている¹³⁾。

私はあの事件の一部始終よく知っている。いつかはこの話をのこしておきたいと思っていた。

煙突男の名前は田辺潔といったが、兄さんの田辺寿利氏は私の先輩であり、恩師でもある。

田辺氏の先祖は金沢市の郊外の田井というところの十村（名主のことを加賀藩では十村といい、十ヶ村の長という意）で、田井の田辺といわれた名家である。田辺家のもと富樫の家々で、富樫が本願寺に亡されて以来、新しい支配者に服せず、前田家の支配になっても、そのレジスタンスはつづきいつしか農民の味方となっていた。いわば田辺のレジスタンスの精神がすでに先祖にあるわけだな。明治維新以後、田辺氏のお父さんの代にいろいろな事業をやったが不測の事変のために成功せず、ついに北海道に屯田兵としてでかけた。そこでたしか三番目の寿利氏以下の兄弟が生れた。兄弟は全部で五人、潔君が一番下だ。

昭和三年、当時神田駿河台のニコライ堂の前にあった刀江書院の二階に東京社会科学研究所というのができ、出資者は先日なくなった、尾高朝雄氏で所長は大塚金之助、副所長に田辺寿利氏になった。かれは当時まだ若かったが、社会学者としてはすでに有名だった。所員は経済学が高島善哉、杉本栄一、小椋広勝、石井光などの一ツ橋の出身者、社会学は私のほかに牧野巽、岡田謙、清水幾太郎、波多野完治などがいた。そこで田辺寿利氏と知りあいになった。

ところがここにいろいろいざこざが起り、大塚氏等と一緒に田辺氏も私もやめてしまった。これは昭和五年二月頃だった。（中略）

私は研究所をやめた直後胸を悪くした。そこで田辺氏をたよって鶴沼へ行った。田辺氏もかつて胸を悪くされた関係から鶴沼に住み鶴沼を愛し、当時鶴沼の池田氏の別荘に住んでいられたのですぐ近くの家を紹介してもらった。……田辺のお母さんが、非常に私を可愛がって下され、ほとんど毎日のように見舞いにきて寝ている私に身の上話をしながら「私の末ツ子に潔というのがいて……」と次のような話をして、だからあなたも失望してはいけませんとなぐさめてくれた。その話というのは大体こうだ。

かれは北海道で胸を悪くし五年位寝ていたが、医者からは右を向いておれといわれれば一日右を向いており左を向いているといわれれば左を向いている、まことに素直な子だった。ところが医者からもうおきてもよいといわれ起きたところがチョコレートのような血を沢山はいた。そこで彼は考えた。今まで医者という通りしてきたがやはりなおらないとすれば、今

度は自分の思う通りにしよう。そこで彼は家族のものの反対をおしきって北海道の有珠という海岸にゆき、そこで医者のことと正反対に荒っぽい生活をやった。ところが体は次第によくなってきた。そこで彼はにしん船に乗って漁師の手伝をし、難破してカツオブシを食ってすごしたこともあった。漁師達は難破のときの用意にカツオブシをもって出かけたのだ。ゆれるマストのでっぺんにのぼることも覚えた。このことは大切だ。かれは札幌第一中学校を三年で中退している。体もよくなり、かれは鶴沼の兄の寿利氏の世話になって勉強することにした。そしてそこで寿利氏の本を読む中に社会科学に興味をおぼえ社会主義に近づいて行ったが一方鎌倉の建長寺に精神修養のために座禅をくみに行ったりした。

一方かれは労働者に対するあこがれから遂に意を決して横浜の日雇い労働者の群れに投じた。そこで道ふしんをしたり、横浜を本拠に清水トンネルの貫通工事に行ったりした。これは後に本人自身が語ったところだが仲間にも胸が悪い者がいたが、歩くことも出来なかったが、その男をひきずるようにして清水トンネルにつれていって一緒にツルハシをもって工事をさせたら直ってしまったということだ。当時かれはこうして土工の指導者になっていた。

しかし潔君は当時自分の住居や、仕事のことについては一切家人に話さなかったらしいが、ときどき飄然と家に帰ってきた。その度毎にお母さんがつれてきた、潔君は私に自分の体験をはなしてなぐさめてくれた。

そうこうする中にある日田辺氏のお母さんがやってきて、新聞を見せ「世の中には面白い人もあるものですね。煙突に登り頑張っている」といいながら写真を指さした。新聞には富士紡川崎工場の争議に一人の若者が煙突にのぼってストライキの煽動をしているという意味のことがかいてあった。ところがその夕方になって寿利氏がやってきて「困ったことが起きた。あの煙突男は弟だ。だれが言ってもおりてこない」と真顔で心配していたが、友人の古野清人氏（現在九大教授）とむかえにでかけて行った。このことを知らないお母さんは「まだ降りません」と面白がっている。次の日に田辺寿利氏がまたやってきて「私達が行ってもまだ降りてこない、困ったことだ」となげいておられた。

この後の談話は事件の展開とその後のことに言及しているので、一応引用はここまでとする。この資料を通じて、次の諸点について検討する必要があると考える。それはまず簡単に述べると①田辺潔の事件までの経歴、②田辺潔の兄である田辺寿利の役割と潔への影響力について、③口述者米林教授と田辺潔との関係、さらに潔の周辺の人々と彼らを通じての田辺の思想と行動について、④田辺潔の諸体験と思想・行動への影響についての4点である。それぞれの項目について、以下若干の考察をすすめてみる。

最初に①の田辺潔の事件までの経歴について、米林の口述に他の資料も交えて整理してみると次のようになる。

田辺潔は1903年、北海道釧路市浦見町に田辺家の6男、末っ子として誕生した（前掲の米林富男の口述では5男となっているが6人兄弟のようで、長兄信一、次兄周二、三兄悌三、四兄寿利、もうひとり兄がいたようであるが名前は不明）。小学校の頃、一家は札幌に転居したために札幌第一中学に進学、3年生の時に長兄夫婦のすすめもあって親元を離れ、横浜第一中学に転校した。長兄宅での生活中結核に罹り養生したが回復せず、札幌の両親のもとに戻って闘病生活を続けた。北海道有珠海岸に転地療養した結果回復し、その後神奈川県鶴沼にいる兄寿利を頼って上京した。寿利のもとで独学中、労働者になることを決意した。清水トンネルの工事人夫に従事したり、ピアノ会社に勤務したり職を転々とするが、その過程でにしん船に乗船するという経験もしたようである。

1927年5月に横浜市電の信号手になり一時黒色青年連盟に属したが、翌年の争議に参加したため解雇された。そしていつごろからか労農党の活動家で川崎市議の糸川二郎宅に居候するようになり、労農党にも接近したようである。煙突に登るにあたってはまったくひとりで計画したわけではなく、後述するように糸川や石原美行などとの接触の上での行動であった。

われわれはまず、田辺家の中での潔の位置を前掲の清水隆久著『田辺次郎吉』などで現在わかる範囲で確定しておく必要がある。寿利・潔の父の名前は現在不明であるが、ふたりの生年から推定して明治維新前後の生まれではなかろうか。その幼少の頃、父（潔からは祖父にあたる）と共に北海道開拓（たぶん釧路市周辺）へ臨んだと思われる。したがって、潔の祖父は1830

年代に生まれたと推定される。ところで、現在金沢市に在住の田辺家は清水前掲書の考察によると、田辺次郎吉の第12代田辺良實家（良實氏は平成5年死去）である。第11代良次，第10代良吉郎と遡ってゆくと，第9代吉他郎（文政12年7月13生）となり，維新直後の1874年に家督を第10代良吉郎に譲っている。吉他郎は1829年の生まれのわけで，最後の十村役であった。潔の祖父が1830年代の生まれだとすると，この9代目吉他郎の弟・分家となる可能性が高い。いずれにせよ潔家は本家の次郎吉家から独立し，北海道におもむいたのであろう¹⁴⁾。

加賀藩成立当初より，前田家は各地の中世以来の土豪を取り立てて十村役とし，改作法を実施する政策をすすめたことはよく指摘されることである。清水前掲書もこうした研究成果を踏まえ，田辺家が一向一揆と何らかの関係があったことを推定している。しかし田辺家の「由緒帳」にははっきりとした記述はないようで¹⁵⁾，いまだ推測の域をでない。しかも前田に従って代々十村役を続けていたことから，前掲の米林の言うように「いわば田辺のレジスタンスの精神がすでに先祖にある」とすることにはいささかの疑問が残る。

もうひとつの経歴の中で問題としうるのは北海道における経験，とくににしん船に田辺が乗っていたとする点である。緊急食料としてのカツオブシの所持やマストでの体験は，煙突に登る際に間接的な影響を与えたことは否定できない。しかし，煙突上の寒さ対策や風雨に対する備えは新聞報道を読む限り十分とは推察できず，北海道での経験を必要以上に強調することは適当ではなからう。

次に潔の実兄である田辺寿利について少々調査したが，ここでもまたちょっとした偶然のいたずらに出会った。それは後述するが，手元に田辺寿利自身の作成したと思われる履歴書の一部があるので，それをもとに経歴等を紹介する。姓名のふりがなは「たなべじゅり」となっており，「明治27年3月15日生」である。潔より9歳年長であったわけである。1917年4月に日本大学専門部政治学科に入学後，翌年9月東京帝国大学選科文学部社会学科にも入学している。1920年3月に日本大学は卒業したが，東大の方は翌年1月に退学したことになる。東京帝国大学の選科生とは，現在の金沢大学でいうところの科目等履修生で，特定の指導教官の講義・演習のみの履修生であっ

たようである。

日本大学卒業後の1921年1月に社会学研究会, 23年3月に東京社会学研究会の創立にそれぞれ関わり, 翌24年4月には日本社会学会の初代理事にも就任。その後, 東京社会科学研究所の創立やフランス学会, 日仏社会学会に関係したりしている。そして事件のあった1930年4月には日本大学講師となりフランス社会学史を担当, しかし翌31年3月には退職しているが, これは弟潔の事件と関係してのことであろう。一方, この1930年代には精力的に社会学の研究をすすめていた。1939年4月, 設立準備過程から協力していた蒙疆学院が創立されるとその副院長に就任したが, 一年ほどで退職し, 戦前は公職にはついていない。

戦後はまず鎌倉アカデミーの顧問に就任し, 1951年4月に東洋大学文経学部教授, 2年後には東北大学教育学部教授に転じ, 東京水産大学教授を併任し, 1957年3月に東北大学を停年退職した。そして同11月から約1年半, 1959年3月までの間金沢大学法文学部社会学教授を勤めている。田辺潔の実兄の経歴を追っていった結果, 筆者の在籍する金沢大学に一時勤務していたことが判明したのである。先程偶然といい, かつ田辺寿利の履歴書のコピーを手にてきているのはこの理由からである。

田辺には『田辺寿利著作集』(未来社 全8巻予定)があり, 現在第4巻までが刊行中である。『フランス社会学成立史』(第1巻)をはじめ, 田辺の主要著作が集められる予定となっている。辞書風にいえば, 田辺は戦前期におけるフランス社会学の代表的研究者であった。この著作集には「月報」が付録されており, そこには田辺が交友した幅広い研究者・社会学者の一群が登場する。前掲の米林の話の中にも, 数多くの研究者の名前が紹介されていた。その影響力は波多野完治が「わたしが田辺さんから教えられたことは, 大学での正教授, 助教授のかずかずの先生から教わったことより, 何倍も大きいのである」(第4巻「月報」所収)と述べていることに端的に現れているといってよい。また彼の学識も非常に広範囲にわたっていたこともさまざまなエピソードでもって語られている。少し横道にそれるが, その余話のひとつの中に, 弟潔の事件を配慮して日本大学に辞表を提出した経緯もうかがえる(馬場明男「田辺先生と日本大学」第1巻「月報」所収)。そして前掲の米

林の引用中であつたように、潔が「寿利氏の本を読む中に社会科学に興味をおぼえ社会主義に近づいて行った」のは確実なことだろう。

田辺の学者・研究者としての姿勢はその晩年になつても変わらなかつたようである。かつて田辺と同僚であつた金沢大学のある関係者は、「まことに自由な発想の先生だった」「ある意味ではスケールアウトした部分もあつた」と筆者のヒアリングに対して回想している。

あくまでも一般論ではあるが、こうした兄寿利の影響力を弟潔が受けて、潔が戦前でいうところの「左翼思想」の持ち主であつたことは、何等不思議なことではなかつた。そして「スケールアウトした部分」も兄から受け継いだものだったかもしれない。

しかしながら、とくに戦前期においては「左翼思想」の洗礼を受けていたことと、それを実践し行動したこととはある程度分けて考えるべきである。そこで③と④に掲げた課題である田辺潔の周辺の人々、さらには田辺潔の諸体験についてももう少し掘り下げておく必要があらう。

まず口述者の米林富男について若干言及する。現在、筆者が承知している限りでは事件と田辺潔に関する最も詳しい口述である。潔と個人的な交流を持っていたが、兄寿利を「先輩であり、恩師」と述べている。米林にはアダム・スミスの『道徳情操論』(未来社 1969・70年)の訳書があり、社会学史・経済学史の研究者であつたようである。米林の話の中で、潔が「医者からは右を向いておれといわれれば一日右を向いて」いるような「素直な子」だつたこと、兄寿利の「本を読む中に社会科学に興味をおぼえ社会主義に近づいて行った」こと、潔が「労働者に対するあこがれ」を持っていたことや兄とその友人の古野清人が説得に行つたことなどを確認することができる。米林はこの古野に次いで田辺家と近い関係にあつたと思われるが、古野の事件に関する発言はまだ入手できていない。

活動の面で田辺潔が影響を受けたと思われるその第一人者は、糸川二郎であろう。当時糸川は労農党系の活動家で川崎市議であつたが、京浜地域の各争議の指導にもあたつていた。彼には『京浜の夜明け 糸川二郎伝』という伝記があり、そのなかで潔が自分のところに寄宿していたことを認めている。

伝記によると、その頃の糸川は委員長大山郁夫のもとで労農党中央執行委員をつとめつつ市議会内での議員活動を行うという立場にあった。当然川崎工場の争議支援に駆けていたが、争議団の財政窮状を見て「自分の議員歳費を担保に戸部の長谷川という高利貸から借金をし、横浜ドック工信会購買組合より米麦等を買入れて」¹⁶⁾争議団を援助したりしていた。それを見ていた田辺は「おやじが、これだけのことをしてくれたんだから、何としても争議にかちたい。おれが煙突に上る」と言い出し、糸川が引き止めたが「遂に決行してしまった」¹⁷⁾とある。思想的な影響や田辺の思想状況について、糸川は何も語っていない。自分の支援活動に反応した田辺が、その正義感からの行動であったと糸川は考えていたようである。それでも、なぜ煙突に登ったのかは不明である。また、争議解決にあたってこうした個人の冒険的な行動を、糸川はどちらかといえばネガティブに評価していたと読み取れる。

もうひとつ川崎工場争議と事件解決にタッチし、労農党の当期中執であった石原美行のヒアリングも残されている。事件のはじまる経緯について具体的に語っているので、少し長文となるが以下引用する¹⁸⁾。

私が労農党委員長の大山郁夫先生から「君、行ってやってくれ」といわれたので争議応援、指導に行ったのです。行ってみれば争議団は27～8人しかいないでしょう。こりゃとてもじゃないけど尋常なやり方では勝ち目は無いと思った。そこで変ったことをやらなきゃ駄目だと思いまして「富士紡の二八〇尺といわれる高いあの煙突の上にあがって“下りろと”いうまで下りないでおったら、必ずこの争議は勝てる。そんな勇気のあるやつはいるか」とアジったのです。

従業員の中には志願者は無かったけれども、糸川君の所に寄食していた田辺潔という男がいましたね。応援にきていたのですが、「俺がやる」というのです。彼は二八歳でしたが、ほんとうにやるのかと念をおすと、「やる！」と頑張るので、「じゃ下りろというまで上がっている」といったのです。これが「煙突男」のはじまりです。降りる時の合図や食糧等は二人だけで打合せて置きました。そして言いだした私は用事がある京都に出かけてしまうわけです。その時、労農党の解党問題が起きておりまして（中

略) その問題処理のために行ったのです。

京都について新聞を見たら、煙突の上に人があがって旗を振っている写真が大きく出ているんです。とうとうやったなあ!と思いました。おっつけ大山先生から「スグカエレ」の電報が舞い込んできて、私は家に帰らずに、すぐさま戸塚の大山先生の所にかけてつけました。大山先生は「あんたとんでもないことを教えたな」とこわ面なんです。私は「二千何百人の工場の中で二十何人の争議団は尋常では勝つわけがない。勝つ手段としてはこれしかない」と説明したんです。大山先生は「あんたやったんだからあんた解決しなさい。仕末してきなさい」といわれましたので、私はまた川崎に出掛けて行ったんです。

石原の言によれば、争議解決の有力な手段として煙突に登ることを直接示唆したのは石原自身であったことになる。前述の糸川の判断とは若干異なるが、糸川の行為に反応して何か行動しなければと考えていた田辺にとって、石原の与えた示唆が煙突に登る動機となったと理解すれば両者の発言に大きな齟齬はないと見ることができる。ともあれ、運動家の争議に関する発言は、争議の中心に自分がより大きくかかわったと語る傾向の強い点を留意しておく必要がある。

しかしながら、石原と大山との関係については少し検討を要する。前述したように、労農党本部は檄文を発表して煙突男の行動を支持していたわけであるし、大山自身も参加した11月18日の川崎における演説会でもほぼ同様であった。したがって大山が自宅に石原を呼んで話した言葉、例えば「とんでもないことを教えたな」というニュアンスと労農党の動きとはやや趣を異にする。

大山個人はどのように煙突男の行動を評価していたのだろうか。近刊の『大山郁夫著作集』(全7巻 岩波書店)には詳細な年譜と著作目録が掲載されている。その中から、唯一大山の肉声に近いのは、11月18日の演説会に関する次の史料である¹⁹⁾。

先生は青年のごとく紅潮されて「諸君、田辺清君は諸君の意志を代表し

て千二百尺の煙突の上で風雨にめげず断食してがんばっております。諸君この争議は全日本の労働者のためにも断じて負けることはできません」(千五百人の聴衆は、熱狂して万雷の拍手を送りました。)

あとで私は「あの煙突を先生は千二百尺といわれましたが百二百尺ですよ」といいますと、先生は「はあ、私は千二百尺といいましたか。ハハハ」と愉快そうにいつて笑われました。

そのほか1930年の後半は労農党の解党問題が起こり、河上肇との間にそれをめぐって激しい論争を展開している様子も著作目録からわかる。そこでは政治路線をめぐる議論に終始していて、煙突男事件に立ち入る余裕はなさそうである。例外は翌1931年に発表された有名な論文「山宣と大衆」²⁰⁾であるが、当時もうひとつの焦点だった霧社事件には言及しているものの煙突男を話題の中には入れていない。今のところ、これ以上大山の考えにより深く接近することができないでいる。

いずれにせよ石原は糸川とはちがって、田辺の個人的冒険的行動を争議解決の有力な手段であったと肯定的に評価していた、とみてさしつかえなからう。さらに付言するならば、石原と糸川の評価は、煙突男事件と田辺の評価の代表的なふたつの対立する見解でもあったのである。

むすびにかえて

煙突男事件後の田辺潔の動向に触れておこう。

事件後、煙突男田辺潔を弁士に加えて「大モテの労農党演説会」²¹⁾だったと石原は語っている。とくに大阪・関西地域ではその傾向が顕著だったようである。そうした演説会のために石原は田辺に洋服を用意したり、演説の筋書きを教えたりしたようだが、しばらくして縁が切れたとも述べている。その後田辺は全協にかかわり、借家人組合の活動にも参加した模様であるが詳細は不明である。そして日本共産党の機関紙「赤旗」に「同志田辺虐殺と判明」「神奈川総評革反を指導して官憲により逮捕、虐殺さる」(第122号 1933年2月28日)という見出しのもと、以下のようなことが突然に報じられた。

去る一月、同志田辺潔は横浜伊勢崎署に逮捕され、拷問に屈せず組織の秘密を守り遂に虐殺された。官憲は彼が泥酔して溝に落ち溺死したのだと宣伝したが、事実は彼の死体が水に浸った形跡なきこと、着用の服だと遺族に渡した品は全然新しく犯行をかくす為の安物の既製品なること、首のまわりに細縄の痕跡がはっきり残ってゐる等々の点から虐殺であることが確かめられた。同志は所謂「煙突」戦術の小ブルジョア的反動的態度をはっきり自己批判し、神奈川総評内革反の中にあつて勇敢に活動し、優れたボルシェヴィキとして自らを鍛へてゐたのだ。

田辺は煙突男事件の後、約2年の間に全協・借家人組合の活動を通じて日本共産党に参加したことが明らかにされる。そしてこの「赤旗」記事によれば、その間に「所謂『煙突』戦術の小ブルジョア的反動的態度をはっきり自己批判」したとされている。少なくとも共産党は煙突男事件に批判的であつたことがわかる。そして1933年1月、田辺は「横浜伊勢崎署に逮捕され、拷問に屈せず組織の秘密を守り遂に虐殺」されたという。なお、この記事伝える「赤旗」の一面には、「同志小林多喜二虐殺さる」というトップ記事も掲載されている。

さて本稿では、煙突男田辺潔の事件へのかかわりとその略歴・思想について小論の提出を試みたに過ぎないので、特段結論めいた事柄を述べるつもりはない。従来の研究では、煙突男事件の直接の当事者としての田辺について若干は論及されてきたが、小論では少なくともその田辺の経歴とか成長環境等について、可能な限り詳細に論じてみようとした。この点については、貴重な談話記録にたどり着いたこともあつて、それを起点に他の史料等を渉猟することもできて、田辺の「思想」と行動についてはある程度明らかにできたと考える。しかし、なお調査不足の感は否めない。事件の当事者である田辺潔自身の史料を手にしていないし、直接の関係者の兄寿利の事件に関する発言も見出していない。また近代以降の田辺家の動向ももう少し追つてみたいと考えるからである。

小論の考察の中で、旧加賀藩関係者の北海道開拓移民について、その一定の歴史の存在にも気づくことができた。明治期の北陸地域からの北海道移民

はかなりの数にのぼることはよく指摘されるが、しかし、その具体的な研究は量的にも質的にも多いとは言えない。北陸地域の北海道移民問題について、今後研究する必要があるであろう。その作業を試みてみなければ、田辺が突然と思えるような形で、なぜ川崎という地の労働争議に登場してきたのかを明らかにすることができないと考えている。より大きな視点で述べるとすると、近代日本のなかで、国内外の移民と移民政策がどのような問題を残したのかの検討が課題となろう。以上も含めてなお続稿を期したい²²⁾。

【註】

- 1) 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵の史料で、例えば最近では荒木澄子『「改作地裁許人」の役割について—田井村次郎吉留帳』の史料から（『市史かなざわ』第2号 金沢市史編さん委員会編 1996年3月）といった研究論文もある。なお『角川日本地名大辞典 石川県』によると、古くは一向一揆の武将松田次郎左衛門の居城といわれる田井城も在ったようである。
- 2) 清水隆久著『田辺次郎吉』（加賀藩十村役田辺次郎吉刊行会 1996年8月）を参照。なお「明治以降の田辺家は、時代の激流の中にほん弄され苦難の道を歩んだ」が、本書は「主題を近世にしばった」とし「明治以後については割愛」している。
- 3) 田辺が登った煙突は「高さ三百尺」と引用史料中にはあるが、川崎工場のこの煙突の高さに関しては諸説がある。当時富士瓦斯紡績株式会社専務取締役だった鹿村美久は、その回顧談（註5）の中で「百三十尺の煙突」と述べている。新聞報道でも百五十尺、百七十尺などと一定しない。また二百八十尺という談話もある。しかし、三百尺=90mとは20階以上の建物の高さとなり、地上と話を交わすには少々高すぎるように思われる。
- 4) 労働運動史料委員会編『日本労働運動史料』第10巻（1959年3月）を参照。
- 5) 「富士瓦斯紡績川崎工場労働争議」（内務省社会局第一部『労働時報』大正14年12月号）、鹿村美久「最近に於ける労働争議の事例（其二）」（日本工業倶楽部調査昭 昭和6年）を参照。
- 6) 堅山利忠編『神奈川県労働運動史（戦前編）』（神奈川県労政課 1966年2月）607頁。
- 7) 湊七良「富士ガス紡績川崎工場労働争議」（『京浜文化』Vol. 14. No. 3 1962年）を参照。
- 8) 前掲『神奈川県労働運動史（戦前編）』610頁。
- 9) 鹿村美久前掲稿「最近に於ける労働争議の事例（其二）」9頁。
- 10) 「社会運動通信」336号（日本社会運動通信社 1930年11月19日）。
- 11) 同前 337号（1930年11月20日）。
- 12) 同前 341号（1930年11月25日）。会社側の関係者の口述（註5の鹿村美久）の中にも、「組合間の色々な軋轢、組合間の暗闘といふやうなものを現した争議」という指摘が

なされている。なお、同345号には26日に争議団が発表した「富士紡解決声明書」が掲載されている。

- 13) 前掲『神奈川県労働運動史 (戦前編)』611～612頁。
- 14) 清水隆久前掲書を通じて金沢の田辺家を訪問する機会を得たが、明治維新以降の田辺家については、北海道開拓も含めてもう少し時間をかけてお話をうかがいたいと考えている。
- 15) 清水隆久前掲書 8頁。
- 16) 神奈川旧友の会『京浜の夜明け 糸川二郎』(神奈川旧友の会 1963年11月) 39～40頁。
- 17) 同前 40頁。
- 18) 石原美行「史上初の“煙突男”で富士紡争議を勝利に」(『月刊 総評』1977年4・5月合併号) 40頁。
- 19) 中田小春「労農党時代の大山先生」(北澤新次郎・末川 博・平野義太郎編『大山郁夫伝』中央公論社 1956年11月) 11～12頁。
- 20) 『中央公論』第46年第4号 1931年4月
- 21) 石原美行前掲稿「史上初の“煙突男”で富士紡争議を勝利に」42頁。
- 22) 再校終了時に、近刊の『近代日本社会運動史人物大事典』(日外アソシエーツ)に接した。そこには労働運動史の専門家栗木安延氏筆の「田辺潔」項が所収されている。田辺に関する最も本格的な紹介であるが、若干意見を異にする部分もある。もちろん学ぶべき内容も多いが、いずれ再検討する機会をもちたいと考える。

(1997年1月10日成稿)